

# 巻 頭 言

計算機センター運営委員長

法学部教授 斉 藤 孝

学習院大学の計算機センターが発足してから、既に十数年が経つ。1983年に現在の建物が完成して、もはや7年が経過した。この間、学習院大学の情報処理教育の中心として、学内の事務処理の面でも、計算機センターの寄与は著しい。しかも、最近における計算機に対する国民の認識の普及と計算機そのものの性能の急速な進歩、いわばハードの面における発達によって情報処理教育に対する需要は増大する一方である。学生の需要に対しても、既に現在の計算機センターの規模では対応し切れないような状況が生まれている。

昔の教育体系でいえば、計算機に関する教育というのは、読み・書き・算盤のうち算盤の修得に当たるものであろう。算盤が進化して、その性能が大規模かつ精密になり、或る面では人間の脳の力を凌駕するものとなった。家庭用のパソコンなどのように、その利用者にとって、その原理や機械のメカニズムはまさにブラック・ボックスであろうが、電子計算機というものが、われわれの知的な日常生活にとって切っても切り離せない存在となっている。電子計算機の実習が大学教育で取り上げられたのも当然であるし、それは電子計算機の進歩とともにますます情報処理教育は向上し充実すべきものであろう。

最近では情報化社会といわれる。その先端を切っているのが電子計算機であってみれば、情報処理に関する教育は、全学生にとって必須であるべきであろう。そうであれば、学生定員に対して、計算機センターは、その教育的機能においてどれだけの規模と収容能力を持つべきかを、十分に検討する必要がある。

従来は、ともすれば、電子計算機などは理科系の技術だという考え方を大学の学生も、また教員も、抱いてきた。しかし、今日ではそのようなことばかり言っていられない。いわゆる文科系の学問も電子計算機の出現によって驚くべき発達を遂げた分野もある。かつて算盤の修得が常識であったように、現在では電子計算機の基礎知識が必要になった。大学で学ぶ以前に高校教育の段階で、電子計算機に触れておくことも必要であり、そのことは今日の子供では無理な要求ではないであろう。